

(株)電通・月刊アドバタイジング書評

田中 洋(法政大学経営学部教授)

1998・3・23記

「学者人生のモデル」ハーバート・A・サイモン著、安西祐一郎・安西徳子訳、岩波書店、1998 年。

日々重ねる選択が人生を決める

日本とアメリカの書店の違いをひとつだけ挙げよ、と言われたら私は躊躇なくそれは「自伝コーナー」があるかどうかである、と答えるだろう。数多く出版される自伝文学はキリスト教の「告白」という制度と関係があるのかどうか。いずれにせよ自伝が数多く書かれ読まれるという土壌を我々は持っていない。

この本は、経営学、経済学、認知科学、政治学、コンピュータ科学と、広大な学的領域に足跡を残したノーベル賞学者、ハーバート・A・サイモンの自伝である。「学者人生のモデル」とのタイトルはいささかミスリーディングである。原題“Models of My Life”に「学者」というコトバは入っていないからだ。我々はこの本を学者の自伝としてだけ読むべきではない。ビジネススクール創設の苦労話、アルゼンチンの小説家ボルヘスとの対話まで含まれている、この短くない自伝には様々な複合した彼の「人生モデル」が詰まっている。我々はこの記述の中に汲み取れる、ひとつの重要なメッセージに耳を傾けようではないか。

それは、人生は選択の連続であり、その際に私たちがかけるちょっとした「バイアス」が我々の行く先を決めているということである。「人生はチェスにととてもよく似ている。目の前にあるいろいろな道を選択するということを何百回も繰り返した結果として」(174 頁)今我々はここでこのようにしているのだ。サイモンはこの意思決定を研究の対象としただけでなく、自分の人生についてそれを記述しようとしたのである。彼にとって自伝とは、自分の科学の方法を自分自身に適用することだったかもしれない。

(了)